第２回　泉大津市総合計画審議会　議事録

日　時	令和元年８月５日（月曜日）　　１５：００　～　１６：４５
場　所	市役所３階　第会議室
出席者 （敬称略）	会　長：臼谷　喜世彦（泉大津商工会議所） 副会長：杉原　充志（羽衣国際大学現代社会学部） 委　員：貫野　幸治郎（泉大津市議会）、高橋　登（泉大津市議会）、野田　悦子（泉大津市議会）、村岡　均（泉大津市議会）、森下　巖（泉大津市議会）、大久保　學（泉大津市自治会連合会）、中　透（泉大津市医師会）、宿南　洋一（泉大津市 PTA 協議会）、高寺　壽（泉大津市民生委員・児童委員協議会）、川井太加子（桃山学院大学社会学部）、平井　拓己（武庫川女子大学生活環境学部）、柴　恭史（桃山学院教育大学教育学部）、森田　雅明（泉大津市）、五十嵐　輝雄（市民）、清水　勝弘（市民）、岩田　雅之（市民）、新子　美奈子（市民） 事務局：吉田総合政策部長、重里総務部長、朝尾都市政策部長、川口健康福祉部長、丸山教育部長、高寺消防長、杉田市立病院事務局長、藤原総合政策部危機管理監、西村教育部理事、政狩総合政策部次長、東山政策推進課長、川﨑政策推進課長補佐、中塘政策推進課係長、宮下政策推進課係員
次第	１　開　会 ２　第４次泉大津市総合計画後期基本計画（案）について ３　閉　会

■議事概要

（１）開会

（２）第４次泉大津市総合計画後期基本計画（案）について

・事務局より「資料１　第４次泉大津市総合計画基本計画後期基本計画（案）」を説明

【第２節　学びあうひとづくり　彩あるまちづくり】

委　　員：コミュニティ・スクールについては、小津中学校区で取り組み、その状況を見ながら全市的に広げると聞いているが、中学校区がいいのかという問題がある。また小中一貫校については、現在ある校区の再編を考えていかないといけないと思う。

委　　員：小中一貫校の考え方の中に、校区編成というものを含めるかどうかの議論があると思う。今現在、校区編成というものを前提に小中一貫校を考えているのかどうかを確認したうえで議論をした方が良いと思う。

事 務 局：現時点では、校区編成までは考えているわけではない。関連する計画として記載してある教育みらい構想の中に、コミュニティ・スクールや小中一貫校の推進に向けての考え方は記載しており、第一次的に小津校区で検討を進めている状況である。

委　　員：小中一貫校やコミュニティ・スクールは、地域の方が運営に関わることが重要なポイントとなるので、地域の方がどのように関わっていくかの視点を書き込んでいけば良いと思う。

委　　員：地域の関わりという点では、小津中学校区であればかなり広い校区となる。もともと小学校を中心に地域で取り組んできたので、小学校単位ごとに設けていかないとなかなか進んでいかないのではないか。

委　　員：小中一貫校をどこに設けるかにもよるが、例えば幼稚園から小学校１年生になった子が、汐見町から誠風中学校まで通えるかという現実的な問題もある。また、地域格差やいじめが始まるのではないかということや、先生方がどこまでサポートしていただけるのか、

そういう点が不安に感じるところである。

委　　員：色々な立場で事情があり、教育委員会が主体で考えて調整しないと、地域がばらばらに意見を言っても収まりがつかない。教育委員会の立場での意見をお聞きしたい。

事 務 局：地域間での差異というのは色々とお考えがあると思う。教育委員会では、教育みらい構想のなかで、小中一貫教育、コミュニティ・スクールに向けてどのように運営していけばよいかの考え方をまとめている。0歳から15歳くらいまでの連続した学びを地域全体で考えられるかということで、まずは小津中学校区をひとつの校区として、コミュニティ・スクールを地域とともに立ち上げたところである。そのあたりの議論を踏まえて今後、他地域にも反映していけるものと考えている。

委　　員：チームとしての学校ということが言われており、先生のサポートだけではなく、地域の方やカウンセラーやソーシャルワーカーといった周りの専門家のサポートも必要である。周りからのサポートといった視点があれば、よりうまく回っていくのではと感じた。

委　　員：20年後、30年後の将来的な人口構成から、コミュニティ・スクールが考えられるかどうかがある。今までも校区編成は中途半端に実施されており、地域によっては昔からの小中学校の地域分けが交錯してしまい、コミュニティが壊れているところがある。

委　　員：コミュニティ・スクールを考える上において、泉大津で地域のつながり、コミュニティをどのように構成していくのかが大切だと思う。校区編成で、学校を選択できる調整区域があり、そのために、子ども会には入れない、兄弟でありながら行く学校が違うといったことが起こっている。子どもたちの成長や教育にどういう影響を与えているのか、もう少し検証をしっかりしないといけない。そういった視点が計画書のなかで見当たらない。

会　　長：施策としては良いが、施策のバックボーンとなる地域の実情に基づいて検証して欲しいという意見をいただいている。それを踏まえて検討をいただきたい。

委　　員：生涯学習について、泉大津市では計画をつくられているのを拝見しているが、生涯学習でどんなことを学習するのかという観点でみたときには、もっと泉大津の成り立ちや産業のことを知る内容であれば、産業部門との連携が必要になってくる。学びなおしを生涯学習に含めるのであれば、人材育成、労働の分野の話となる。それをYouTubeやオンラインのコースで提供するのであれば、ICTとも関連してくる。非常に多分野と連携してくる。生涯学習を行政が提供するうえでは非常に重要なことだが、対象や内容についてはこれからますます検討する余地があると思う。

委　　員：学校教育であれば、校区の話は子どもだけではなく、大人のコミュニティとも関わりがある。地域福祉、生涯学習、労働問題、青少年育成、若い人が社会に参画するというところから考えるとワーキングプアも問題である。生涯学習では、特定の人を教育するだけでなく、子どもが学ぶ横でお母さんも学ぶ、同時にいろいろな立場の方が学ぶ視点が大事であり、他の施策との関連性、横や縦のつながりがもう少しあると深みがでるのかなと思った。

委　　員：新たな取組も提示されているが、他にももう少し取組を提示していただけないか。図書館整備などの新しい構想も出ており、公共施設の節になるかもしれないが、それらも含めて議論いただければと思った。

事 務 局：事務局としての案はすでに出させていただいている。それを見て議論いただくなかで、

新しく入れたほうがよいものがあれば具体的にご提案いただきたい。

委　　員：ハード面や環境の整備については、別の節とも絡むので、そちらで意見させていただきたい。目標値については、全体的に上げていくなかで、数値を設定した根拠があるのかについても各節で意見させていただきたい。

【第５節　コンパクトで居心地のよいまちづくり】

委　　員：泉大津市の人口が減少するなかで、コンパクトな泉大津市の特色をいかに生かしていくかという視点で、全体の項目を横串しにして、住環境の良い住みやすいまちづくりを進めていくことが重要である。住環境が悪い点として、住工混在、緑が少ないことがあり、公園が少ないのはどうしようもないので、例えば高石市のように、街路樹を増やして緑を増やす視点もあるのではないか。また、泉大津の駅の近くでマンション開発が進んでいるが、同じような区画のマンションができると同じような世帯が入ってくることになり、子どものいなくなる時期が重なり、その結果、学校が必要なくなるなど、いろいろな問題が生じることになる。例えば、マンションの大きさでもいろいろなパターンとなるよう行政指導するなどを考えていただきたい。今のマンションをみると緑地空間が少ないように感じる。緑地空間をつくるような行政指導をされてはどうか。住環境と書きながら、臨海部、環境保全を横串しで見た場合、どういう視点で住環境をつくっていくのかといったポリシーが感じられないように思った。

委　　員：もともと工場があったところに住宅地ができている。一方で業種が変わって、まちのなかに運送会社ができたりしており、毎朝大型トレーラーが家の前を何台も通っていくようなことが起こっている。臨海部の基本施策では、港湾地域に工場を他から誘致する視点はあるが、市内の企業を誘導することも是非考えてほしい。臨海部に行っていただいた方が会社としても発展していけるし、地域住民にとっても住環境が良くなる。緑の問題についても、公園を増やすことができないなかで、例えば大津川や港湾などに、緑地指定が一部されているが、指定されていないところは荒れたりしている。市域の河川のところは緑地指定をして改善を行い、緑の広がる市民の宝にしていくという考え方を是非持っていただきたい。

委　　員：住環境について、泉大津市で従来のような市営住宅が必要なのか、発想の転換が必要ではないか。集約化を図りながら、空いた土地については、資金捻出のために売却することなども是非考えていただきたい。臨海部については、安定型区域は企業誘致されているのはわかるが、管理型区域について、現在は府から泉佐野みどり推進機構が委託を受けているが、市と考え方が同じような団体を早く見つけて、年に１回のコンサートだけでなく、もっと活用方法を考えてほしい。道路交通に関しては、市民会館等の跡地の周辺道路、小松４号線を拡大して臨海部からの一方通行だけではなく、都市計画道路の抜本見直しという点と合わせて、ここに明記することを考えていただきたい。

委　　員：住環境の成果指標のグラフで、これまでの経緯があって目標値を設定していると思うが、市民の役割の部分で、「耐震対策を自らの問題として捉え、自主的に住宅の耐震化に取り組みます。」と記載があり、これを続けてきた結果、上手く進んでいないのだと思う。今後、どういう形で耐震化をより一層進めていこうと思っているのか、行政の役割として明記されるべきだと思う。もう１点、協働の考え方の市民の役割のところで、「地域のま

ちづくり活動や会議などに積極的に参加します。」とあるが、アンケートに地域活動があることも知らないという人やリーダーが少ないということも書かれている。今後の進め方についてどのように考えていくのか、ここに明記して推進を図っていく必要があるのではないか。臨海部に関して、現状を鑑みて目標値を下げたとあったが、目標は今から5年後である。ここだけ安易に目標値を下げた理由を教えていただきたい。市民会館、消防署の跡地があり、その有効利用が必要であり、この計画ができてから後におきていることだと思うので、臨海部のところに、緑地公園の整備とあわせて、どのように進めていくのか、考え方を載せていくべきかと思う。

会　　長：下方修正した理由だけ説明をお願いする。

事 務 局：臨海部の埋め立ての進捗が、計画を立てたときよりも遅れているという状況があり、前提条件の変更にあわせて修正している。

委　　員：59頁に、自転車通行空間の整備の推進とあり、泉大津市でもアルザ通りに自転車の通行帯があり、方向が示されているが、逆行して右側通行している自転車が多い。せっかく自転車空間をつくっているにも関わらず、それが活かされていない。結果を検証して、使われていない場合は、正しく使われるようにしていないといけないが、警察や行政において指導をしているところを見たこともない。いくらいろいろな政策を打っていっても無駄なことになる。インフラだけの問題ではなく、人の認識の問題も書き入れるべきと思う。

委　　員：臨海部について、旧来からある部分が内陸部とすると、交通の交流を臨海部からの視点だけではなく、内陸部からの視点でも考えるべきである。市民に親しめる港づくりにむけて、交通が不足している部分があるので、その点を織り込んで考えていただきたい。

委　　員：61頁、公園整備のところで、「みんなの使いたいを実現し、みんなの満足を増やす公園づくり」を新たに書き加えていただいているが、泉大津の公園の現状で、大津川の横に少し大きな板原公園などほとんど使われていない印象の公園がある。現状を踏まえた上でここに盛り込むことを考えていただきたい。63頁の下水道の取組の事例のなかに「公営企業会計の適用」と書かれているが、このことが下水道事業の経営改善にどうつながるのか、この文章だけでは市民は理解できないと思うので、説明が必要ではないか。

会　　長：書かれている内容が市民生活にどのように影響を与えるのかわかりにくいということで、もっとわかりやすく表現して欲しいという意見である。

委　　員：61頁の取組の事例に遊具の計画的な改修とあるが、公園のワークショップに参加した際の市民の生の声としては、今の子どもは遊具があるだけでは遊ばないというのが大半の意見であり、のびのびと遊べる空間で、緑があって、極端な話、芝生だけで良いという意見もあった。取組の事例は、形式的なものとなっているので、ワークショップの生の声を反映していただければと思う。

委　　員：62頁、現況と課題に、「下水道整備普及率（雨水）は、平成30年度末37.4%であり、今後整備を推進する必要があります」と書かれているが、成果指標では、当初45%であったのが40%に下げられている。下方修正している理由をお伺いしたい。

事 務 局：もともと整備普及率を上げていくにあたって、純然たる下水道整備という部分と、既存の雑排水管を下水道管として活用できるのではないかという設定のもとに、目標値を設定していた。しかし、調査していくなかで、雑排水管が下水道管として取り入れること

ができないということが判明したため、目標値を下げている。

【第６節　誇れる・選ばれる・集えるまちづくり】

委　　員：市民アンケートでは泉大津市には観光資源が多くないという回答が多いように感じたが、産業観光や体験型観光など書かれており、百舌鳥古市古墳群の世界遺産登録などもあり、私自身は非常にポテンシャルがあると思っている。しかも実際にここの線路をたくさんの人が行き来しており、途中下車してもらう取組は可能性があり、指標である駅の乗降客数は確実に変化し得る。一方で、オーバーツーリズムの問題など市民生活としてはいろいろな影響がある。それを活かしきるためには多言語対応、多文化対応など、コストや手間もかかってくる。市民の皆さんが、観光資源をどれくらい取り込んでいきたいかということに関わってくると思う。それによってここの書きぶり、計画や施策が変わってくると思う。まず、その点について意見を伺いたい。

委　　員：住んでいる市民としては、大阪市内と比べると、宿泊施設の確保という、手段としてしか考えられていないのかなと思う。宿泊施設が少なすぎるのかなと思う。インバウンドで経済を潤わすのであれば、観光産業を増やすこともありかなと思うが、アンケートにもあったが、市民は観光資源がないと思っており、観光資源をすぐに答えられないのが現状かなと思うので、もっとよく議論したほうが良いと思う。

委　　員：一番大きな点は、市の組織のなかに、観光の名のつく部署がないことである。観光を売り出すのであれば、観光係でも良いので、きっちりとした部署を作るぐらいの気構えが必要。また、駅前に、観光のモニュメントや案内図はあるが、情報を詰め込みすぎて地図が良くわからないところがあるので、その点も考えていただければと思う。とりあえず、観光を打ち出さないと進まないと思う。

委　　員：成果指標に、池上曽根弥生学習館・織編館の利用者数が挙げられているが、取組の事例には、池上曽根遺跡をどう活かすかやどう売り込むかということが書かれておらず、違和感があった。ここについては、どうお考えなのか。

事 務 局：池上曽根弥生学習館と織編館は、体験型施設として利用いただくように推進しており、池上曽根弥生学習館では、歴史を学ぶ勾玉づくりや卑弥呼の衣装を着て時代のさかのぼりを体験したり、織編館では、毛布の縁を使ったモフ草履づくりなど繊維産業と結びつけた体験型の施設として取り組んでいる。

委　　員　池上曽根遺跡は泉大津市と和泉市にまたがっており、書きにくいのかもしれないが、泉大津市の駅からも利便性のあるところなので、もっと売り込んではどうかと思う。

委　　員：以前、まち・ひと・しごとの国の交付金を活用して、神戸まで行って帰ってくる観光船が出たが、一回だけで、後はフェリーの会社がやるかどうかを考えるということであった。泉大津市内には見て回れる遺跡もたくさんあるので、来てくれたらこんなコースがこれくらいの時間で回れますよといったマップ作りが必要である。また、文化財と書かれているが、京都と同じ数の神像がでてきたのは、日本中で泉大津だけであり、有形文化財もあるので、アピールできるような形にしていければよいと思うので、しっかりと明記をして進めていっていただければと思う。

委　　員：先ほどの港湾にも関わるが、以前、阪九フェリーに乗船する機会があったが、新門司港に降り立ったときと、泉大津に帰ってきたときのまちのイメージが全然違った。新門司

港に降りたときには、整然として綺麗であり、ここから門司港レトロにつながるという印象があったが、泉大津はまちの景色が非常に良くない。ハード面からの整備が必要だと思うので、取組の事例のなかで、港湾整備などを明記してはどうかと思う。

委　　員：観光については、市民の皆さんが、人を呼んで、経済効果を享受すべきという合意形成があって、いろいろな方策が生まれ、ハードやソフトの整備も出てくるものなので、ポテンシャルは非常にあるんだなという感想である。もう一つ、大きく考えないといけないのは、産業の人材問題であり、外国人労働者が増えてくるという現状認識は書かれているが、産業側としてどのように受け止めて、受け入れていくか。市内に住んでいかれるときに、多文化共生をどうやって成し遂げていくか、大きな課題を突き付けられている。産業振興は人がいないとだめなので、商工業の振興の観点からもこれから検討すべき点であり、問題提起をさせていただく。

委　　員：病院関係から言うと、回復型の寝たきりの患者が多い病院では、フィリピンやベトナムからヘルパーを呼んできて、こちらで言葉を教育して、雇用している。実際 2025 年に向けて、老人や寝たきりが増えるが看る人材がいない。泉大津の個人病院は小さいところが多いので、そこまで推進できるかわからないが、世間としてはそのように変化してきている。

委　　員：68 頁の観光について、織編館は、昔は２階にあり、立派な博物館であったと記憶しているが、今は１階のコンパクトなところに押し込められていて、織編館が博物館だった認識を持たれるかたは少ないと思う。これはすごく残念である。泉大津の財産なので、もう少し市民にもアピールすることで観光につなげられないか。展示品が固定化されていたり、企画展が少なかったり、収蔵物もたくさんあると思うので、眠っているものに光にあてて活性化して欲しい。

【第７節　健全な行財政と都市経営に基づく市民サービス】

委　　員：財政関連では、土地開発公社の問題を是非取り入れていただきたい。財政指標の改善のために、国が最後に手を差し伸べた開発公社の健全化には乗らなかったのは事実であり、債務を返していかないといけない。年間 5,000 万円前後の金利負担がかかっており、この問題を解決していくことが一番大事だと思っている。歳入の確保については、ふるさと納税制度が注目を浴びているが、昨年度は 1.5 億円と、当初の 2 億円にとどかなかった。財源の涵養という点で、国の制度に則りながら、当市の形を打ち出して、得た財源は維持していただきたい。公共施設では、教育施設については、児童数が減っており、年間に１、２回しか使わないところでも空き教室という認識を持たない教育現場の感覚を変えていただきたい。地域コミュニティの拠点として学校を地域に開放しようと言うのであれば、市民にオープンにし、当然使う側の市民も安全に対して責任を持たないといけないが、学校を場所がないところを補充する候補として考えていく必要がある。総論は賛成だが、各論に入ると、使っている人が既得権益のように使っているのをどうするのかという考え方が多い。市民も、無くなるから反対という姿勢ではなく、お互い話し合いながら、いろいろ考えていく総合的な発想を考えていただきたい。

委　　員：80 頁の公共施設で、本市では適正配置基本計画を平成 29 年につくっており、この中に図書館を含めて複合的に整備することになっていたが、実際は図書館が駅前に移転する。

いつの間にか方向性が変わってきており、総合計画の基本的な位置づけの問題だと思うが、市長が変わって政策的な転換が起こってくるものなのかを確認しておく必要がある。行政のまちづくりについて一定の考え方を示すのが総合計画であって、全て変わってはだめというわけではないが、総合計画を常に意識しながら施策を考えていくものだと私は思っている。そういった意味で、前回は市民協働で意見したが、その時の政策で大きく変わっていいのかどうか、変わるのであれば、大きな方向転換になるが、そのことの議論や説明が少なく、我々にも十分に納得いく説明がないことが残念である。総合計画の基本的な部分に関わる部分であると思っている。

委　　員：この計画を見る限りでは、公民館や図書館が老朽化しているため、全て建替えるように読み取れる。視点として疑問に思うのが、公民館や総合福祉センターなど実際通っている方は高齢者であり、施設が３つあって、それぞれ同じようなことをしているという現実があり、コンパクトシティに３ついるのかと思う。そのまま建替えると財源の無駄となるので、もっと集約化して、今の建物を良くすればいいと思う。図書館の件も、起債すると財源の問題もあり移転案が出されていると思うが、その点も含めて、現施設の建て替えの方が良いというだけでなく、市の各施設の総合的なあり方を抜本的に考えて、コンパクトシティで一番良いものは何なのか、議会や市民の意見も入れ十分議論いただければと思う。

委　　員：生涯学習や文化・芸術など、指標の目標値を高く設定している一方で、公共施設の適正配置も大事な話だが、公共施設の数を減らして稼働率が上がり、目標達成であると言うのであれば、少しおかしいかなと思う。必要なものとそうでないものについては、市民と協議すべきであり、必要なものについては、複合化したものをつくるべきだと感じる。生涯学習や文化・芸術に関心を持ったり、イベントに参加したりするには、施設や場があってはじめて持てるので、その点も含めて、総合的な議論をするべきだと思う。

委　　員：建物はただの箱ではない。学校１つとっても、空き教室の有効活用は大事な論点だが、労働の問題のところで記載があったが、今後外国人労働者が増えれば子どもも入ってくる。その子たちに日本文化を教育する場が必要であり、学校や公民館は社会教育施設として使っていくことが優先される。そのようなことも考えた上での教室の活用や重複した施設の利用を考えていく必要がある。

委　　員：物理的な狭さだけがコンパクトではない。市民が必要なサービスにどのようにアクセスできるかをベースに考えることだと思う。公共施設に、例えば車いすや高齢者の方がアクセスできるのか、どういうサービスを享受できるのかを考えておく必要がある。情報関係ではMaaSが地方自治体でも課題になってくる。どのような形で移動性を確保して、公共サービスや市民サービスを受けることができるかといった視点が必要である。

委　　員：高齢化が進む中で、いくらコンパクトなまちだと言っても、河原町の人は買い物に行くのに困っている。小学校は小学１年生でも歩いて行ける範囲に設定されている。そうした単位が大事である。今地域にある施設で使えるものは、できるだけ永く使いながら、地域の皆さんが使える状況を大事にしていくことが重要である。複合化、多機能化の視点もあるが、市民のためになるのか、しっかり考えられないといけない。いろいろな可能性、条件を示しながら一つ一つの施設のあり方を検討していくことが大事だと思う。

委　　員：公共施設、地域のコミュニティの場が、移動ができる範囲内にあることも必要だと思う。

そのうえで、複合化については、公共施設適正配置基本計画を基本として、どのような形で組み合わせていくと良いのか、みんなで議論し、市民が納得できる、財政の影響を勘案して上向いてきた財政を崩さないような形で、しかも永く使えるような、公共施設適正配置基本計画に沿った形で考えていかないといけない。一つの勝手な案かもしれないが、現行の図書館のところに、南公民館と勤労青少年センターの複合化ができれば、南公民館の土地が空く、そこに虫取の市営住宅を建替えて、順繰りで考えていけば、財政的にもそれほど厳しくならないのではないか。教育、環境という縦割りではなく、総ぐるみで、泉大津市で考えていく視点を持って進めていただきたい。

委　　員：子ども達が図書館に行くことを考えたら、私の小学校では校区外になる。子どもだけでは行けないので図書館の利用を断念してしまう。今の図書館のある校区の子が、駅前に移転することによって校区外になって、図書館に行けなくなる。そうすると生涯学習のところに記載されている「本に親しむ子どもを増やす」という機会を奪ってしまうことにもなりかねない。複合化の視点のなかに、子ども達も使えるような施設を入れていただければ、学習の向上につながり、読書活動の推進にもつながる。お年寄りも大人も大事だが、子どもの視点も入れていただきたい。

副 会 長：２回にわたって、各論で議論が深まってきたと思う。近年、コンパクトシティの考え方が広まっているが、泉大津市は私がイメージする理想的なコンパクトシティになる可能性がある自治体である。先ほどの公共施設の適正配置の問題も、老朽化が進んで、建替の時期が集中してきていることをチャンスとして捉えるべきだと思う。災害について泉大津市の場合は、山側の土砂災害はなく、海側の津波災害の問題があるので、コンパクトシティと必ずしも両立する考え方ではないが、災害に強く、それから緑豊富なという、２つを形容詞にしたコンパクトシティをめざすという視点で、横串しでこの総合計画を精査していくと、一貫性が見えてくるのかなと思う。コンパクトシティの中身については、コンパクトで平坦な地形で、交通利便性があることを考えたときに、いろいろな世代、お子さんも含めたニーズを把握しながら、コンパクトシティの議論を全体で深めていただければよいと思った。横串しをさすことで、先ほど議論のあった観光についても、ちゃぶ台がえしになるが、果たして、観光集客、インバウンドを増やそうということが、私がイメージしている災害に強く緑豊富なコンパクトシティをめざすのであれば、必要ないかもしれないという気もしている。泉大津市単体で、従来の名所旧跡、文化財を目的としたインバウンドをめざすことは難しく、観光については、コンパクトシティをめざしつつも２つ可能性が十分にあると思っている。１つは、計画書にも記載されているが体験型ツーリズムで独自性を出すということ。もう１つは、9 市 4 町の連携のなかで、最終目的地は古墳でも大阪城でもいいと思うが、その途中に泉大津に立ち寄ってもらうことがあり得ると思う。しかしそれはあくまでも、住まう定住人口、住民が住みやすいまちと両立するものでないといけない。オーバーツーリズムの問題もあり、お金を落としてもらうからいいというものではない。誤解を恐れずに申し上げれば、果たして観光集客を柱にする必要があるのかなという気がしている。いずれにしろ各論が深まって、いろいろと勉強をさせていただいた。

会　　長：いろいろな意見をいただき、お礼申し上げる。進行を事務局にお返しする。

（３）閉会

事 務 局：次回の第４回泉大津市総合計画審議会は 10 月 21 日（月）１５：００からを予定している。場所も本日と同じこの場所を考えている。

以上